

# 彼女の銀と僕の嘘

英語英文学科 3年 神保直天

すごく嫌なことがあった。

僕は、夜になつて人が多くなつたのに、どうか無機質な駅の改札を通りながら、少し前に見た光景のせいで回転しなくなつた頭を、無理やり動かして考へる。考へるといつても、それが理解できなかつたわけじゃない。一目見ただけで、どういう意味があるのかはわかつた。とてもわかりやすかつた。だから、考へたいのは、整理したいのは、嫌だと思う自分の心についてだ。

確かに、今、すごく嫌な気分だけれど、どうしようもないくらい落ち込んでいるけれど、この気持ちは、はたして、正当なものなのだろうか。

はつきり言つて、僕には関係のないことだ。なんで、何も関わりがないことを、僕が気にしなければいけないのだろう。僕がどんな気持ち

になつたところでどうなるものでもないし、どうにかしたいとも思わない。だから、こんな気持ちを抱くのは不純でしかないはずだ。

できるなら、すぐにでも忘れててしまいたい。

でも、忘れないと思うこと自体、気にしているという証拠で、だとすると、そう思つ心そのものをどうにかしない限り、逃れられはしないのかも知れない。

もし心が捨てられるとしたら、たぶん生ゴミだろう。いや、粗大ゴミかもしない。腐つているか、壊れているか、違いはその程度だけれど。

ゆっくりと、プラットホームへ続く階段を上る。踏み出す足は重く、顔を上げるのも億劫だつた。左手を手すりに乗せ、力なく引きずる。細い点字ブロックの付いたステップが、一定のペースで後ろへと流れしていく。足が同じ動きを

繰り返す。

何だか、一瞬がずっと続いているようだ。

うなだれたまま階段を上りきると、じんわりと汗ばんだ体を涼しい空気が包んでくれた。少し解放された気がする。

目の前に電車が停車している。ちょうど各駅停車だつた。慌ただしくドアから流れ出てくる人を、鬱陶しく思ひながら避けて歩く。でも、空気の抜けるような音を立てて、ドアが閉まつていく。急ぐのも面倒だつたので、誰も座っていないベンチに向かう。焦つたつてろくなことがない。スーツの男の人が階段を駆け上がり始めたが、間に合わず、電車は行つてしまつた。その背中を見ていみると、なぜか溜め息が出た。

ベンチに座つて辺りを見渡す。夜のホームに何事もなかつたかのようだ。男の人は歩いていく。スーツの男の人が階段を駆け上がり始めたが、間に合わず、電車は行つてしまつた。その背中を見ていみると、なぜか溜め息が出た。

は、ほとんど人気がなかつた。たつた今電車が出たからだろう。

横の自動販売機の照明がやけに明るい。あれだけ自己を主張している存在が、他にあるだろうか。

向かいのホームの行列が目に入る。携帯を見ている人。友人と笑い合つている人。ただ立っている人。いろいろな人が同じ列に並んでいた。僕もあの人達と同じ、大勢の中の一人に過ぎない。人間としての価値は何も変わらない。今は線路を一本隔てているけれど、たとえどれだけ離れたところで、彼らとの距離が遠くなることはない。あの中で、いったいどれだけの人が自分

の無意味さに気付いているのか。

ベンチの背もたれに体重を預け、空を見上げる。夜の暗幕に黄色く光つている月が浮かんでいる。ぼんやりとした半月だつた。星はない。きっと、街が明るすぎるのだろう。月明かりで雲が動いているのがかすかにわかるだけで、僕のいるところからは気が遠くなるほど遠い。暗い空から目を落とすと、煌々と輝くライトに目が眩んだ。

あれから時間は経つたけれど、嫌な映像はまだ消えてくれない。意識したくなくても、色褪せた断片が無音で再生されてしまう。モノクロ

「中瀬くん?」

「彼女のほうから、声をかけてきた。  
僕に気付いてくれた。

僕の名前を、覚えていてくれた。

体が委縮する。

心臓が強く鳴る。顔が火照る。

彼女は僕を見ている。

僕は線路を見ている。鈍く銀色に光る線路を。

「じロ屋つて……タワレコ?」僕を見たまま、

の世界の中で、彼女は幸せそうに笑つている。煙草が吸いたい。

喫煙所まで移動するのは面倒だ。ここで吸つてしまおうか。周囲には誰もいないが、たとえ誰かがいたところで気にしない。駅員に見られても、注意されることはないだろう。鞄から煙草を取り出す。だが、ライターが見つからない。煙草と同じ所に入れたはずなのに。探していると、ひとりの女性が階段を上つてホームにやってきた。

手が止まる。

とつさに煙草の箱を鞄に隠す。

どうして、ここに? どうして

挨拶したほうがいいだろうか。いや、どうせ

僕には気付かないだろう。僕と彼女は知り合い以下の関係でしかない。僕なんて覚えていないかもしれない。下手に声をかけて変な感じになるのはごめんだ。無視するに越したことはない。

先に気付いてさえしまえば、気付かない振りができる。

ところが。

あれから時間は経つたけれど、嫌な映像はまだ

消えてくれない。意識したくなくても、色褪せた断片が無音で再生されてしまう。モノクロ

……本当に行つちゃうのか。

いや、それでいいんだ。彼女と話せば話すだけ、僕の思う僕らしさが褪せていく。

しかし、そのまま行つてしまふかと思つた彼女は、僕の隣に座つて、持つていた鞄を膝の上に置いた。

近い。

体が委縮する。

心臓が強く鳴る。顔が火照る。

彼女は僕を見ている。

僕は線路を見ている。鈍く銀色に光る線路を。

「じロ屋つて……タワレコ?」僕を見たまま、

彼女は訊ってきた。

「そうだけど」

「こつ？」

「さつき」僕は短く答えて、横目で彼女を見る。

彼女はすでに僕から田を離し、レールのほうを向いていた。

「じゃあ、やつぱりあれ、中瀬くんだったんだ。

そういうかなと思つたんだけど。私もさつ

きしたんだよ、そこに。話しかけようとしたん

だけど、目が合つたのに知らんぷりされちゃつ

たから、違う人のかなつて。すぐに出でていつ

ちゃつたしさ」彼女は優しく微笑む。

「そつなの？」全然気付かなかつた

嘘だ。

本当はちゃんと気付いていた。彼女がいて気

付かないわけがない。その上で無視しただけだ。

それ以外の選択肢なんて、考へることすらし

よつとしなかつた。

「まさか、それで追いかけてきたとか？」僕は

冗談っぽく言つた。彼女が僕を追いかけてくる

なんて事実はないと確信していたからこそ、口

にすることができた、笑えないジョークだ。

もちろん彼女は笑つていない。

もしかして、気に障つてしまつたのだろうか。

充分にありえる。まあ、嫌われたなら嫌われた

でいい。

そのほうが楽だ。たぶん言つてもわからんない

「あ、ちょっと麋鹿にしたでしょ」

「うん。した」

「ひどい！」彼女は陽気に笑つた。その笑顔は

楽しそうだった。勝手な思い込みかもしない

けど、そう思つた。だけど、さつき見たあの幸

せそうな笑みとは、明らかに違つ。

そこに含まれている心の重みが、全然違つ。

少しちなくなる。

また会話が途切れた。今度は電車のせいじゃ

ない。

月を見る。月光が雲に透けていた。

段々と、僕らのいるホームに人が増えてきた。次の電車までまだ時間があるので、もう並んで

いる人もいる。

「聴くの？」洋楽沈黙に耐えきれなくて、僕

は強引に会話を続けようとする。

「言わればわかるかも。中瀬くんは？」どん

なの聞く？」

「サムとか、ニアロとか……。あんまり詳しく

はないけど」

「ニアロって、ニアロスマミスだよね。そのくら

いはわかるよ」彼女は背もたれに身を預ける。

「そのくらいしかわからないんだけどね……。しかも名前だけ」

電車が走り出すまで会話はなかつた。彼女に

悟られないように、呼吸を整える。それだけで

少し落ち着いた。

「何買ったの？」静かになつてから、彼女が訊いてきた。

「それ。そんな風に見える？」

僕は頭を搔く。意外だとか、イメージだとか、

そんな主觀的で自分勝手なもので判断されるの

は、はつきり言って心外だつた。今までまとも

に話したことないのに、僕の何がわかる。勝

手に決め付けておいて、勝手なことを言わない

でほしい。

「じゃあ、今度さ、何かじり貸してね」僕の心

境も知らずに、彼女は話し続ける。

「ここに嫌な顔をするのは簡単だけれど、僕は

快く答える。「別にいいよ。どんなのがいい？」

「じゃんなのって言われてもなあ。正直、全然知

らないから……。とりあえず、中瀬くんのおス

スメで」

「人に勧められるほど、一家言持つてゐるつてわ

けじやないんだけどね」

「わつきの」と。私がタワレコで見たつて言つ

た。

「さつきさ、絶対気付いてたでしょ」

また、ドキッとした。

彼女が言った言葉の真意がわからないからじ

やない。身に覚えがあるからだ。

彼女はじつと僕を見ている。その視線をやり

過ごうそうと、脚を組んで空を見る。

「……は？」何が？」見苦しいかもしれないが、

僕ははぐらかす。無駄だといつことは明らかだ

けれど。

「わつきの」と。私がタワレコで見たつて言つ

「洋楽だよ。たぶん言つてもわからんない」

「あ、ちょっと麋鹿にしたでしょ」

「うん。した」

「ひどい！」彼女は陽気に笑つた。その笑顔は

楽しそうだった。勝手な思い込みかもしない

けど、そう思つた。だけど、さつき見たあの幸

せそうな笑みとは、明らかに違つ。

そこに含まれている心の重みが、全然違つ。

楽しちなくなる。

また会話が途切れた。今度は電車のせいじゃ

ない。

月を見る。月光が雲に透けていた。

段々と、僕らのいるホームに人が増えてきた。

次の電車までまだ時間があるので、もう並んで

いる人もいる。

「聴くの？」洋楽沈黙に耐えきれなくて、僕

は強引に会話を続けようとする。

「言わればわかるかも。中瀬くんは？」どん

なの聞く？」

「サムとか、ニアロとか……。あんまり詳しく

はないけど」

「ニアロって、ニアロスマミスだよね。そのくら

いはわかるよ」彼女は背もたれに身を預ける。

「そのくらいしかわからないんだけどね……。しかも名前だけ」

電車が走り出すまで会話はなかつた。彼女に

悟られないように、呼吸を整える。それだけで

少し落ち着いた。

「何買ったの？」静かになつてから、彼女が訊いてきた。

「それ。そんな風に見える？」

僕は頭を搔く。意外だとか、イメージだとか、

そんな主觀的で自分勝手なもので判断されるの

は、はつきり言って心外だつた。今までまとも

に話したことないのに、僕の何がわかる。勝

手に決め付けておいて、勝手なことを言わない

でほしい。

「じゃあ、今度さ、何かじり貸してね」僕の心

境も知らずに、彼女は話し続ける。

「ここに嫌な顔をするのは簡単だけれど、僕は

快く答える。「別にいいよ。どんなのがいい？」

「じゃんなのって言われてもなあ。正直、全然知

らないから……。とりあえず、中瀬くんのおス

スメで」

「人に勧められるほど、一家言持つてゐるつてわ

けじやないんだけどね」

「わつきの」と。私がタワレコで見たつて言つ

た。

「さつきさ、絶対気付いてたでしょ」

また、ドキッとした。

彼女が言った言葉の真意がわからないからじ

やない。身に覚えがあるからだ。

彼女はじつと僕を見ている。その視線をやり

過ごうそうと、脚を組んで空を見る。

「……は？」何が？」見苦しいかもしれないが、

僕ははぐらかす。無駄だといつことは明らかだ

たとえばすれ違ったとき。  
たとえば近くに座ったとき。

たとえば今日みたいに、偶然見かけたとき。  
必然性と必要性がない限り、話したりなんかしなかった。

面識があるとはいえ、知り合いと言えるほどの関係ではないし、だからわざわざ話しかけることもないと思った。

話せば話すだけ、自己嫌悪に陥るから。優しい人、面白い人、素敵な人。自分とはかけ離れた誰かを演じてしまつ、見栄を張つてしまつ自分がとても嫌になるから。

一緒にいる間はいい。彼女と会話をすることは楽しい。それは認める。できるだけ長く傍にいたいと思うし、彼女のことを探りたい、僕のことを教えたいとも思つ。

でも、彼女と離れて、自分が何をしたかを思ひ出すと、恥ずかしくなる。彼女の相手をしている自分はとても馬鹿みたいで、後には後悔しか残らない。

だから、どこかに行くとつい彼女を探してしまつ自分をなんとか抑え付けて、平静を保とうとする。できるだけ彼女に近づかないでおこうとする。その結果、避けるようになつてしまつ。つまり、今のこの事態はイレギュラーなのだ。

彼女が僕の名前を覚えていたことも、僕に話

しかけてきたことも、僕にこれほど絡んでくることも。

体が熱い。顔に汗が浮かんでいる。それを彼女に見られたくなくて、拭きたいけれど、その行為すら恥ずかしい。

気まずい雰囲気をどうにかしたくて何か言おうとするけれど、声が裏返りそうだったから止めた。

「ねえ、どうなの？」彼女はしつこく訊いてくる。

「まあ、避けてるつちゃ避けてる」咳払いをして、僕は曖昧に答えた。

「え？ 嘘、ほんとに？」どうやら本気で言っていたわけではないらしく、彼女は驚いた。

「なんだ？ 私、中瀬くんに何かしたつけ？」

「そういうわけじゃないけど……」

「じゃあ、なんで避けるの？」彼女は少し身を乗り出す。

「言わせるのか？ 僕に。それを。

まあ、そういうの。僕と彼女は何の関係もないのだから、気にする理由がない。

僕が気に入らないだけだ。

「だって、天城さん、僕の知らない人といったから」僕はたつた一つの単語を言いたくなくて、慎重に言葉を選んだ。

彼女は僕が何を言いたいのかわからないよう

で、首を傾げた。

口に手を当てて、心を静めようとする。冷たい汗が背中を伝った。

「そういうことだよ」僕はすべてを言葉にしたくなくて、会話を打ち切ろうとした。

「どうこうこと？」彼女は納得がいかないよう

で、説明を求めてくる。

「声かけたらお邪魔かなと思つて」僕は茶化すよ。

嘘ではないけれど、本心でもなかつた。ただ単に、彼女が誰かと一緒にいるのを見たくなかつただけ。

「なんだ、そうだったの？」彼女は明るく叫び、「気にしなくていいのに」

「確かに、気にしなくていいんだらうね……」

彼女のことを気にしてしまつのは、やっぱり、気になつてしまつからで。

どうして気になるのかも、本当はわかっていない。

どれだけ言い繕つたところで、気持ちは変えられないのかもしれない。隠すことはできるけれど、それは表に出していいだけで、彼女のことを見ていないわけじゃない。

このまま隠していれば、やがて消えてくれると思った。

想いは言葉にしなければ伝わらない。なら、

言葉にさえしなければ、誰にも伝えなければ、想いはなかつたことにできる。

そう思つていた。でも、この状況。いるのは僕と彼女。

電車を待つ人達の中で、ここにいるのは一人だけ。いや、無理なのはわかっている。どう転んでも、僕の気持ちが受け入れられることはないとわつ。でも、だからこそ、いつまでも悩んでいるくらいなら、けじめをつけたほうがいいのかもしれない。それに、もしかしたら、もしかするかもしないじやないか。

僕に声をかけてくれた。僕に、気付いてくれた。この状況で期待してしまつのは、僕が馬鹿だから？

馬鹿でも、いっさ。今なら言える。あのさ、「ん？」何？」胸が熱くなる。息が苦しくなる。

「僕は、」

僕は、君のことがずっと、ずっとと前から

その時。きらり、と、何が光つた。彼女の左手の薬指の銀色が。

きらきらと月のよう光つていた。

あ。

「電車、来たよ」僕は声になりかけた言葉を呑みこんで、別のこと言つた。体温が一気に下がる。

ガタガタと、ホームに電車が入つてくる。始めは一本の線だつた光が減速して、ガラス窓に変わつていき、やがて停車した。

彼女は立ち上がり、近くの列の最後尾に並ぶ。

「あれ？ 中瀬くん、乗らないの？」ベンチに座つたままの僕を見て、彼女は言つた。

「それ、各停でしょ？ 次の急行に乗るよ。そつちのが早いから」

「そう？」私の降りる駅、急行は停まらないな

いじやない。

僕を覚えててくれた。

僕に、気付いてくれた。

この状況で期待してしまつのは、僕が馬鹿だから？

馬鹿でも、いっさ。

今なら言える。

「ん？」何？」

胸が熱くなる。

息が苦しくなる。

たとえばすれ違つたとき。

たとえば近くに座つたとき。